参加者による記録

2014年1月18日（土）

18：30　事前研修会・結団式

2014年のスタディ・ツアーは、羽田から夜行便を利用するため、事前研修会と結団式を空港に直結した羽田エクセルホテル東急で行った。

事前研修会・結団式では吉井会長の挨拶、参加者全員の自己紹介後、山岡事務局長より、アジア連帯委員会の歴史・活動概要、ラオス、タイの訪問先の説明をおこなった。その後、メンバーは、訪問先での挨拶、記録、写真の役割を決め、訪問先へのお土産等を分担し、航空券等必要書類を受け取った。

吉井会長挨拶

その後、羽田国際空港行きシャトルバスで国際線ターミナルに移動し、それぞれ両替等を行った後、航空会社カウンターでチェックインした。荷物は到着地ラオス・ヴィエンチャンまでスルーで送る手続きをした。

2014年1月19日（日）

日付けが変わり、１：05にメンバーを乗せた飛行機は羽田空港を出発した。

１：05　羽田発　ＪＬ033　－　６：05　タイ・バンコク着

早朝、バンコク・スワンナプーム国際空港に到着後、しばし休憩。その後、訪問先についての学習会を行ってから、ヴィエンチャン行きＰＧ943便に乗り込んだ。

９：45　バンコク発　ＰＧ943　－　11：00　ヴィエンチャン着

ヴィエンチャン空港到着後、空港からわずか１５分のホテルメルキュールにチェックインした。

ヴィエンチャンの空港前で

2014年1月20日（月）

10：00　ソムサバット村小学校（第４番目校）

報告：田中　英二

到着が日曜日のため、実質本日がプログラムの初日となる。ＣＳＡ事業活動の中心の１つである建設寄贈小学校への視察・交流を行った。

ソムサバット村小学校

ソムサバット村小学校への視察は当初の予定には無かったが、急遽前日に視察できることになり、トナミ村小学校の前に訪問することになった。

到着するとサムペッツ校長より歓迎の辞をうけ、図書室にて濵本団長の挨拶及び意見交換が行われた。ちなみに図書室は日本人のヤマモトエツコさんに寄贈されたものとのこと。

サムペッツ校長の説明によると、この小学校は1998年に設立。生徒数は268名（女子122名）。内訳は、１年生60名（23名）、２年生57名（28名）、３年生57名（30名）、４年生54名（28名）、５年生40名（13名）。各学年２クラスずつ。教師は12名。生徒は８つの村から集まってきており（８～10ｋｍ圏内）、自転車や親の送迎、トラックに相乗りして通学している。卒業生は、大学へ進学する生徒が多いとのこと。

問題点として、先生の指導力に課題がある事と、16年間使用してきた屋根の老朽化による雨漏りが挙げられた。屋根の修理は、軍からトタンを20枚もらい、特に雨漏りのひどい箇所を修理した。ＣＳＡからも支援をお願いしたい。材料を支援してくれれば教師と村人で修理するとのことだった。確かに屋根はかなり老朽化しており、すぐに修理が必要であると感じた。

山岡事務局長から、ＣＳＡでは既に１，２番目校の修理支援を行っており、経過年数からも修理は妥当である。持ち帰り前向きに検討したいと返答した。

その後、教室を訪れ生徒と交流を図った。訪れたのは５年生の１クラス。折り紙で交流を図った。初めはお互い少し緊張気味も、折り紙の折り方を教え始めると、みんな目を輝かせ、夢中で「紙飛行機」や「風車」などを折り始めた。出来上がると子どもたちは無邪気な笑顔で喜んでくれたのが嬉しかった。複雑な「鶴」もあっという間に覚えてしまい子どもたちの呑みこみの速さに驚くばかり。特に喜ばれたのが新聞紙で作った「兜」。実際にかぶれるのが良かったようだ。

子どもたちからたくさんの笑顔のパワーをもらい、ソムサバット村小学校を後にした。次回から新聞紙を多めに用意した方が良さそうだ。

ソムサバット村小学校で折り紙

ソムサバット村小学校で

13：30　トナミ村小学校訪問（第６番目校）
報告：田中　英二

トナミ村小学校（6番目校）

昼食を挟み、ヴィエンチャン首都より220ｋｍ離れたトナミ村小学校を訪問・視察した。ここで生徒と綱引きをして交流を図る予定である。「綱引き隊長」に任命された壹岐さんも気合が入っている。

到着すると、校長先生や関係者からの出迎えを受けるが、肝心の生徒がいない。つい先日試験期間が終了し、今は休み期間に入ったとの事。残念ながら綱引きは中止となった。生徒と交流できないことは残念だったが、教師や郡教育省副局長、村長たちと意見交換することができた。

ブンジャン校長より歓迎の辞を受けた後に、濵本団長の挨拶及び意見交換を行った。

ブンジャン校長の話によると、トナミ村は、1,298世帯、人口7,229名（女性3,417名）。山岳民族のラオ族1,866名（966名）、中ラオ族361名（175名）、モン族5,002名（2,006名）の民族構成。次世代を担う子どもたちは、３～５才が538名（270名）、６～10才が928名（433名）となっている。

トナミ村小学校で先生に折紙を教える

生徒数は、1,298名（591名）。内訳は、１年生298名、２年生279名、３年生250名、４年生250名、５年生221名、１クラス人数は50名、全26教室となっている。教師は31名（11名）。プレスクールは70名２クラス。

問題は３つ。１つ目は山岳民族の言葉の問題。プレスクールに入って言葉を学ばないと、小学校に入ってから勉強に支障が出てしまうとのこと。

２つ目は、就学前の子どもの人数が多いので、今後教室が足りなくなる。出来ればもう１校建ててほしい。教師も足りない。

３つ目は校舎の老朽化。台風で２度屋根が飛んでしまった。その都度村人が直したが、とにかく雨漏りが激しい。

トナミ村小学校の第一印象は、とにかく老朽化が激しいこと。午前中に視察した第４番目校より後に出来たにも関わらず、それ以上に傷みが激しい。敷地内にあるルクセンブルク市寄贈の校舎と比較すると尚更そう感じてしまう。校舎は高台にあり、周りに建物や木が無い。風の影響をもろに受けてしまう環境である。これは実際に訪問しなければわからない事であった。トイレも使用できない程老朽化している。水があれば使用できるそうだが、乾季は井戸が枯れて使用できない。水道があれば良いとのことだった。山岡事務局長より、修理材料の支援を日本に持ち帰り、前向きに検討することを約束した。また、日本で起こった東日本大震災の事を生徒に伝えていたり、教室の至る所に折り紙が飾られていたりと、日本を好意的に思ってくれていると感じた。

トナミ村小学校にて

最後に、持参した文房具や綱引きの綱、サッカーボール等を贈呈し、先生たちに日本の折り紙で「兜」の折り方を教えて、小学生に教えてほしい旨伝えて、小学校を後にした。

18：30　ＣＳＡ高校寮卒寮生との交流
報告：三島　慎太

１月20日の夜は、サンティーパープ高校寮を卒業後、ヴィエンチャン大学へ通う学生との交流会を行った。ラオスには大学がヴィエンチャンにしかないため、サンティーパープ高校寮を卒業した優秀な学生は、ヴィエンチャンに移り住んで大学に通っており、大学卒業後は政府機関へ就職したり、日本へ留学した人も過去に10人程いるとのこと。

会場は、ＣＳＡのラオスでの活動拠点となっている、佐古商店のレストランを貸し切って開催された。私たちは、昼間に訪問した小学校からヴィエンチャンに戻るのが遅れ、予定時刻の約１時間遅れでの到着となってしまったが、約20名の学生たちは私たちを温かく迎えてくれた。

交流会では、ラープなどのラオス料理、刺身や巻き寿司などの日本食と、お互いの国の料理が並び、学生の中には刺身を初めて食べる子も多く、食べた生徒からは歓声（悲鳴？）が上がるなど日本食を楽しみながら交流した。

ラオスの生活を説明してくれる子、日本に行ってみたいと話す子など、多くの子と話すことができたものの、我々の英語がつたないばかりに、相手は一生懸命しゃべってくれるのに、意思疎通に苦労し、申し訳ないなと思った。

交流会の後半には、私たちから学生に、じゃんけんでの争奪で記念品を渡した。壹岐さんとじゃんけんし、勝った人から好きなものを選べるはずが、壹岐さんが連戦連勝…。ようやくじゃんけんで勝った子が出ると、大歓声が上がり、盛り上がった交流会となった。

卒寮生と交流

2014年１月21日（火）

８：30　ラオス教育・スポーツ省

報告：藤沼　伸一

ラオス教育･スポーツ省で

朝一番でラオス教育・スポーツ省を訪問。ラオスの小学校の総責任者であるミトン初等教育局長にご対応いただいた。

ミトン初等教育局長からは「今年初めての外国からのお客様」ということで歓待を受け、ラオスの小学校における現状の説明がなされた。ラオス国内にある約8,000校のうち、ＣＳＡの支援で23の小学校を建設してもらった。24校目も現在建設中で近日中に完成するが、まだまだ小学校の数は足りておらず更なる支援を求められた。また、過去に建設した小学校の老朽化もあり、ラオスの国としても維持管理を何とかしたいが、資金が無いため支援をお願いしたいとのことであった。

三島団長より今回の訪問に対する挨拶と、ソムサバット村小学校とトナミ村小学校を前日に視察した旨をお伝えし、実情を把握したため、日本に帰り支援の必要性を訴えていくとの報告がなされた。また、ソムサバット村小学校での子どもたちとの折り紙を使った交流の報告もなされ、「子どもたちの目の輝きが非常に印象に残り、ラオスに来て良かった」との感想もお伝えした。

９：30　ラオス日本大使館

報告：藤沼　伸一

教育省訪問に引き続き、在ラオス日本大使館を訪問。個人的にはアメリカ、韓国、中国の日本大使館を訪れたことがあるため、セキュリティの厳重さは毎度のことであったが、異国で日本の香りのする場所に来ると「ホッとする」というのが実感であった。

酒向団長の挨拶のあと、経済協力班長の大西参事官よりラオスの現状についてお話しを伺った。

ラオスの概要として、1986年以降全方位外交を推進しており、1997年にＡＳＥＡＮに加盟。北朝鮮を含む社会主義国との関係を維持しつつ、西側諸国の意見も聞き入れながら関係を拡大している。一党独裁ではあるが公平性、安定性を保っており、治安も良く国民の不満も少ない。５か国（タイ・ベトナム・中国・ミャンマー・カンボジア）に囲まれた内陸国で「海の無い国」。但しメコン川の水資源に富んでおり、日本などの援助により造られた「ナムグムダム」がある。このダムで作られた電力はタイに輸出されており、ラオスの電力事情は良好とのことであった。反面、乾季と雨季があるため、遠隔地では水に苦労している村も存在し、今後の課題となっている。

在ラオス日本大使館で団長あいさつ

ラオスの国土は日本と同じくらいの面積があるが、国民は約650万人ということで、近隣諸国と一桁違う。高等教育を受けた人がまだまだ少なく、教育の質が問題となっている。この背景には農村の人々は「農業をしていれば食べられる」という意識があり、子どもも労働力となり、教育に対する重要性が理解不足となっている。

また、問題点として挙げられる項目に医療水準の低さがある。これは制度上の問題（医師免許の制度が無い）もあり、高度な医療を受けたい人はタイに行ってしまうとの事であった。

今後のラオスについては、外国人観光客が毎年増加しており（特にインチョン空港からの直行便が就航したため韓国からの観光客が急増）、今後の観光産業には期待が持てる。また、昨年の安倍首相の訪問により、日本からの直行便開設に向けた航空協定締結の検討を行っていくとの事で、日本からの観光客の増加にも期待が高まっている。

ラオスにおいては道路網の整備は進み（かなりでこぼこ道の舗装道路ではあったが･･･）、メコン内陸部の物流の拠点となりつつある。2015年のＡＳＥＡＮ経済統合により内陸部への物流の重要性が更に増加するとの事であった。（日本企業のラオスへの投資も増加中）

最後に、忘れてはならないのは、ＵＸＯ（不発弾）の問題。ベトナム戦争において、国内が「ホーチミンルート」の一部となっていたため200万トンを超える爆弾が投下された。

ラオス政府は不発弾処理を大きな課題としており、日本もＮＧＯを通して不発弾処理を支援している。

在ラオス日本大使館で岸野大使と

参事官のお話しで印象に残ったのは、ＣＳＡの事業である「中古衣類の支援」について「検討の余地があるのでは？」とのご発言であった。「支援する側」と「支援を受ける側」の意思疎通をきちんと行わないと、どこかでミスマッチが発生するとの意図であると思うが。「支援とはなんだろう」とつくづく考えさせられた。

最後になるが、今回、岸野博之　駐ラオス日本国特命全権大使とお会いすることが出来た。短時間ではあったがＣＳＡの活動の説明と意見交換ができたことはとても良かった。

11：30　ラオス保健省救援衣類保管倉庫
報告：濵本　将矢

ラオス首都であるヴィエンチャン市郊外にある保健省倉庫を視察した。
倉庫へ行く道のりは、舗装されていない道路であり、砂埃のひどい環境だった。
倉庫の中は、各組織の救援衣類のダンボールが積み重なっていた。
倉庫内の在庫は、災害復興支援として1,000箱送ったとのことで、2,051箱残っていた。その中から、自分たちの仲間が送った救援衣類を必死で探しだし、あらためて自分たちの支援が届いていることを認識した。

ラオス保健省の衣類倉庫の表示板

ラオス保健省衣類倉庫にて

13：00　ラオス保健省との懇談
報告：濵本　将矢

ラオス保健省のナオ・ブッタ官房長官が同席し、クアラオ・レストランにて保健省主催の昼食会が開催された。
冒頭、ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアーを代表し、鈴木団長からお礼の挨拶を述べ、お菓子缶やカレンダーなどのお土産を手渡した。
つぎに、ナオ・ブッタ官房長官から歓迎の辞が述べられ、ラオスの北部では、寒い地域があり、衣料支援が大変役に立っていることや、地方では、医療が浸透しておらず普及率が低い問題があるが、診察を受けたら衣類を渡すなど、医療と救援衣類の提供をあわせることにより、医療の普及率向上にも繋がっているなど、感謝の言葉が述べられた。

ラオス保健省と意見交換

昼食をとりながらの意見交換であったが、ツアー参加者の各人より熱心な質疑が出され、有意義な意見交換が実施できた。

16：30　難民を助ける会ラオス事務所
報告：藤沼　伸一

難民を助ける会ラオス事務所の前で

ＡＡＲ Japan［難民を助ける会］は1979年に、インドシナ難民を支援するために、 政治・思想・宗教に偏らない市民団体として、前会長の相馬雪香さんが設立を呼びかけ、1979年以来の活動実績を持ち、国連に公認・登録された国際ＮＧＯです。ＡＡＲ Japanへは「連合・愛のカンパ」から支援金が支出されています。

現地スタッフの岡山則安さんに迎えられ酒向団長の挨拶の後、パワーポイントを使ったＡＡＲ Japanのラオスでの活動内容についての説明を受けた。（岡山さんはラオス在住１０年になるそうです。「こんなに長くいるとは思わなかった・・・」との余談も）

活動の１点目として、車いすの製造と普及支援を行った。この活動は2011年に終了している。支援内容としてはラオス政府と協力して、車いすの工房を作った。車いすは障がい者個々にあった器材が必要で、メンテナンス（修理）も自国で出来なければ意味が無いとのこと。また、平坦な土地だけで使うのでは無く、ダート（悪路）でも使用できる車いすも必要で、個々人に対するアレンジが大切であることを教えて頂いた。一部の支援団体が中古の車いすを支援物資として送ってくるケースもあるが、サイズも合わず、修理も出来ないという状況を作ることは、かえって問題を残すとのご意見も頂いた。

２点目の活動として障がい者向けの小規模企業支援としてキノコ栽培やナマズの養殖なども行っており、大きな収入ではないが障がい者が自ら稼ぎ、生活費の足しにすることは非常に大切なことだということであった。

３点目は日本大使館でもお話しのあった不発弾問題。
ＡＡＲ Japanはシェンクワン県のクラスター爆弾を含む不発弾の被害者支援を行っている。ラオス全体での不発弾の被害者は2008年で負傷208名、死者96名、計304名。2009年で負傷82名、死者35名、計117名。2010年で負傷93名、死者24名、計117名。2011年は負傷51名、死者13名、計64名。という状況で、医療体制の整備や住民への不発弾の危険性の教育により負傷者、死者数は減ってはいるが、毎年多くの被害が出ているという事実もある。不発弾処理を今のペースで進めると100年はかかるという現状に、この国が抱える大きなハンデを感じざるを得なかった。

2014年１月22日(水)

タイ　救援衣類引渡し式
報告：壹岐　健

８：30　ヴィエンチャンからノンカイへ　車移動
約一時間くらいの車移動。途中でラオス⇒タイの国境を渡る。少し出国に手間取ったが、無事にタイに入ることが出来た。

国境越えの手続き風景

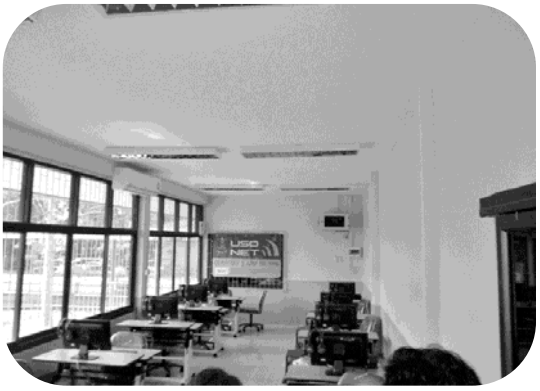
10：20　タイ救援衣類引渡し式

ノンカイ 救援衣類引渡し式

ノンカイ障がい者職業訓練センター内の大きな体育館内にて引渡し式を行う。
来賓は30名（近くの村の村長さん他多数）、村民150人（子ども達も含む）が出席していて「2013年のＣＳＡ救援衣類活動」のＤＶＤを見た後に、まずは村の代表者（村長）へ衣類を渡した後に村民へ手渡しを行いました。ツアーのメンバーも参加し、自らの手で村民や子ども達へ手渡しをして、引き渡し式に参加した。

11：10　ノンカイ障がい者職業訓練センター視察

今回からはじめての視察箇所。ノンカイにある障がい者を支援するためにある職業訓練施設。大きく分けて７つの職業訓練用の施設があった。
一つ目はパソコンを使ったリハビリ施設。主に目の障害や手に障害がある人用にパソコンを使う訓練施設。
二つ目の訓練施設はタイ式マッサージを教える訓練施設。４名の方が勉強していて、先生も盲目の障がい者でした。
三つ目は洋服を作る施設。ミシンなどを使う施設でここでも訓練している方がいました。手が弱いのでハサミを使いながら少しずつ、リハビリを行いながら習得していた。
四つ目はコンピューターの訓練施設。主にエクセルやワードを勉強して事務的な仕事に就くための訓練を行っていた。
五つ目は美容院。髪を洗ったり、切ったりということを教えており、先生は、生徒にはじっくり教えている（少しずつ時間をかけて）。最終的には自分の店を持つようになるとのこと。
六つ目はバイクの修理。ラオス自体にはバイクがたくさん走っているので需要がある仕事ではないかと感じた。また要望でホンダ、カワサキの部品がほしいといっていた。修理練習用の部品とのこと。
最後はテレビの修理を訓練する施設だった。サムソンのテレビを使って訓練をしていた。ブラウン管しかないので薄型のテレビも（需要が増えている）使って訓練をしたいとのことだった。


ノンカイ障がい者職業訓練センター

ヴィエンチャンからルアンプラバンへ移動
17：30　ヴィエンチャン発　ＱＶ103
18：25　ルアンプラバン着

ラオス国内線の飛行機は中型機が多く、預ける荷物の重量に制限があるため、あらかじめ心づもりしていた。そのため、チェックインはスムーズにできた。チェックインを済ますと、少し時間があったのでチームメンバーは、それぞれ交流を深め合った。
フライトもスムーズで、約40分でルアンプラバン空港に到着した。

ヴィエンチャンからルアンプラバンへ

2014年１月23日(木)

10：00　サンティパープ高校寮

報告：三島　慎太

寮生の出迎え

ルアンプラバンのサンティパープ高校学生寮を訪れ、寮生との交流会を行いました。寮を訪れると、寮生全員が玄関前に集まり、私たちを温かく出迎えてくれた。

サンティーパープ高校自体は、生徒が約3,500人もいる大きな学校とのことだった。そのうち、学生寮には90人の学生がおり、寝食を共にしながら勉強に日々励んでいる。

歓迎のあいさつでは、校長や寮長などから、ＣＳＡの日頃の支援に対する感謝のあいさつがあり、現在は試験の時期で物理や数学、国語などを頑張っていること、運動会や文化祭のようなイベントもあること、寮生が自分たちで野菜等を栽培していることなど、生活ぶりの一端を聞かせてもらった。

また壹岐団長からは、「一緒に暮らす者同士、友情を大切にして勉学に励んで下さい。ぜひ日本に留学で来てください。日本で待ってます！」と歓迎に対するお礼のあいさつをした。

その後、私たちを歓迎する儀式が始まった。祭壇のようなものを囲んで、全員が輪を作りお祈りした後、先生・学生全員が私たちの手首に歓迎の言葉や健康のお祈りをしながらミサンガのように紐を結んでくれた。みんなが丁寧にお祈りしながら結んでくれたので、とても感動した。

その後、ラオス民族の踊りが披露された。女性は全員がシンというラオスのスカートを身に着けていた。踊りが３曲ほど続き、続いて４曲目かな？と思ったら、ツアーメンバーを巻き込んでの踊りとなり、我々も見よう見まねで踊った。数曲踊るうちに、学生全員での踊りとなり、教頭先生の演奏も民族の音楽から、だんだんディスコ調となり、激しい踊りになり、大盛り上がりのダンスタイムとなった。また、ＣＳＡメンバーからは歓迎のお礼に「上を向いて歩こう」を全員で歌うなど、ツアーメンバーも学生も全員で楽しいひとときを過ごした。

高校生寮での団長あいさつ

バーシーセレモニー

ルアンプラバンからバンコクへ移動
17：20　ルアンプラバン発　ＰＧ946
19：20　バンコク着

ルアンプラバン～バンコクへ

定刻の出発、フライトはスムーズで、タイのバンコクの郊外にあるスワナプーム国際空港に到着した。入国手続きも比較的スムーズでした。その後、バンコク市内に入り、シンハーなどタイビールとタイしゃぶしゃぶでバンコクに無事に着いたことを喜びあった。

心配されていたバンコク市内は非常に静かだったので皆安心した。

2014年１月24日(金)

９：00　タイ社会開発福祉省倉庫（救援衣類保管倉庫）
報告：鈴木　啓子

タイ衣類倉庫の中のダンボール箱

社会開発福祉省が管理する衣類倉庫を視察した。倉庫にはＣＳＡから送られた段ボール箱が天井まで山積みになって保管されていた。その中から、自分たちが送った段ボールを探すが、あまりにも山積みになっていたので、なかなか見つけられなかった。

受け入れた衣類は倉庫で男女、大人、子どもに分類され、ＰＣに入力し管理される。さらに分類した衣類を大きな袋に入れてまとめて保管し、要請があるとその袋を各地域へ運送する。すべてが手作業で行われるとのこと。女性用はとても多いが、子ども服は全体の1/4ほどだそうでまだまだ不足しているとのことであった。他にもスポーツ用品やぬいぐるみ、タオル、文房具などの教材も必要で、特にぬいぐるみは喜ばれるので、箱の中に入っているのを見つけるとうれしいそうだ。また地方の子は働くため、スカートや長いコートではなく、動きやすいズボン・短いジャンパーが喜ばれるという話であった。

タイ衣類倉庫前で

タイ･衣類の仕分け風景

14：30　在タイ日本大使館
報告：酒向　真澄

今回我々が、お世話になったのは岡島参事官・室伏一等書記官であった。
濵本団長の挨拶を行った後に、お互いの自己紹介をし、その後、岡島参事官から、在タイ日本国大使館における国境難民に対する事業についての説明をしていただいた。

タイ・ミャンマー国境９難民キャンプを基盤とした災害リスク削減計画、火災リスクの高い、難民キャンプと隣接タイ人村10村に防災設備を設置、防災トレーニング等を実施し防災リスク低減および安全・環境保護の意識を高める活動をしているとの事。
また、ミャンマー人難民と近隣タイ人のための住居保全計画、竹の育成技術や取扱い手法などを教育・指導する場を設けているとの事。
この他に、訓練器材としてエンジン・工具は日系企業から提供を受け難民に対し、帰還実現後に活かせる職業スキルとして、エンジンメンテナンスやコンピュータースキルの訓練を実施していると説明があった。
また、計画中ではあるが、タイ・ミャンマー国境沿いで、ミャンマーより越境して受診に訪れるミャンマー少数民族に対しての医療の充実化、帰還後の自立的生活の実現に向けた職業訓練施設の設置（一部は増設）等の説明をしていただいた。

その後、室伏一等書記官からタイの経済状況について、説明をしていただいた。
日本のＧＤＰと比較したタイのＧＤＰは、2000年までは３％弱であったが、2010年では６％まで上昇している、タイの産業構造を就業者から見ると、農林漁業が４割と高いが、ＧＤＰ構成で見ると製造業が大きな割合となっている。15％程度の就業者が国のＧＤＰの３割強を生み出しているとの事。
また、ＡＳＥＡＮの中では、タイのＧＤＰはシンガポールについて２番目の規模。一人あたりのＧＤＰでは、シンガポール・ブルネイ・マレーシアに次いで４番目であるが、出生率はシンガポールに次いで、低く、今後、少子化の負の影響が懸念されるとの事。
日タイ経済関係で、タイの輸出相手国の上位は、中国、日本、アメリカであり、2010年以降は、中国が１位で、日本は２位との事。
タイ国内の地域格差の状況は、バンコク首都圏や東部では一人あたりのＧＤＰが40万バーツを超える水準だが、東北部や北部では、５万バーツ程度にとどまっているとの事。

タイは、賃金が安いので各企業が進出してきたが、今後は、難しい。また少子化問題でタイの労働人口の不足が懸念されるとの事。

その後質疑を行い、経済問題や労働問題ならびに現地の状況などについて意見交換を行った。特に今回のタイの状況について、日本では大変なことになっているかの報道だが、タイでは、一種のお祭りと捉えているとの事だった。

最後に、大使館の入口で参加者全員での記念写真を撮り日本大使館を後にした。

在タイ日本大使館前で

17：30　お別れ夕食会

帰国前の最後の日となる夕方、「お別れ夕食会」を空港近くのショッピングセンター内のタイレストランでおこなった。チームのメンバーは、ツアープログラムを無事終えることができる安堵感や共有できた体験や感動について語りあうとともに帰国後の再会を約束する等、楽しい時間を過ごした。そして、全員でチームメンバーの無事と帰国まであと一歩となった安堵感などをかみしめ合った。

お別れ夕食会

22：25　バンコク発　ＪＬ034

2014年１月25日(土)

６：００　羽田着

全員無事に入国審査を済ませ、藤沼さんの挨拶、山岡事務局長の解団宣言の後、お互いにお疲れ様を言い合い、それぞれ帰路に着いた。（皆様、大変お疲れ様でした）

羽田に無事帰国

サンティパープ高校ＣＳＡ寮

高校寮生に衣類を引き渡し

寮生と一緒に